

# 中島敦「山月記」

——夢の現実感——

—

「後で考へれば不思議だつたが」と袁慆は思う。虎に変身した旧友と会話しながら、「其の時、袁慆は、この超自然的怪異を、実に素直に受容れて、少しも怪もうとしなかった」。これは、奇妙な夢からさめた者の感慨と同じである。「後で」とはいつのことだろう。李徴と別れ、再び山道をたどり始めてまもなくだろうか。それとも、長安に戻り、李徴の家族と連絡を取ろうとして、初めて我に返った時だろうか。いづれにせよ、あの一夜を現実だと信じ続けるならば、袁慆は夢からさめていないままに等しい。以後ずっと、彼の現実には夢のようなものだったかもしれない。虎になつたばかりの自分を見て、李徴は、「之は夢に違

東 典 幸

ひない」とまづ考えた。なぜなら、「夢の中で、之は夢だぞと知つてゐるやうな夢」を見たことがあつたから。しかし、夢だと気づいているなら、「夢の中」であらうとさめているに等しい。さめている限り、自分は李徴なのである。「異類」「殊類」となつた李徴にとつて、自分が自分であることと、自分が人間であることは同義だ。ただし、彼が虎になりきつてしまう「酔つてゐる」時間帯には、この自意識も失われる。そして、この時間帯の方がだんだん長くなつてゐる。つまり、二度とさめることのない段階が近づいている。これは死の床にある者の状況と同じだ。

「ああ、全く、どんなに、恐しく、哀しく、切なく思つてゐるだらう！ 己が人間だつた記憶のなくなることを」。ここで李徴は、死を恐れ哀しんでいるようにも見える。し

かし、彼がしがみつくのは生ではなく「記憶」だ。彼が手放そうとしないのはこれだ。「曾ての李徴が生きてゐるし、いゝ」を残さねば、「死んでも死に切れないのだ」。「山月記」の語り手は、李徴のこの執着に応えるかのように、何度か「記憶」をよみがえらせる。たとえば、李徴と袁慆の語り合う始まりは「青年時代に親しかつた者同志の、あの隔てのない語調」であつた、とかつての二人の交友ぶりを読者に共有させる。また、李徴の自虐を聞く袁慆には「昔の青年李徴の自嘲癖」を思い出させる。

記憶を残すこと。李徴にとつては、李徴自身の記憶だけが問題なのではない。彼が彼であつたことを歴史が記憶することこそ重要なのだ。李徴が詩人を志す理由は「詩家としての名を死後百年に遺さうとした」からである。虎になつた今でも彼の願ひは、「己の詩集が長安風流人士の机の上に置かれてゐる」ことだ。一方、虎になつたことについては、嘆きはしても、人間に戻りたい、とは一言も言わな。記憶を残す欲望こそ李徴の李徴たる本質であり、それに比べれば、彼の「臆病な自尊心」も「尊大な羞恥心」も虎に変身した理由として重要であるにすぎない。

李徴が詩人になりたいと思う、その奇妙な点を確認して

おこう。本格的な詩人論でもない、ごく初歩的な問いとして、ふつう、人はなぜ詩人になるのだろうか。当然ながら、表現したいことがあるからに違いない。では、李徴は何を表現したいのか。李徴にとつての文学とは何なのか。名を残す、それは文学の問題から除外して考えていいだろう。しかし、それ以外に李徴に何があるのか。「山月記」から読みとることはできない。具体的な作品として読者が読めるのは、平凡な七言律詩ひとつである。袁慆が部下に書きとらせた「長短凡そ三十篇」は「格調高雅」「意趣卓逸」だと言う。しかし、たとえば、たしかに杜甫は格調高雅で李白は意趣卓逸かもしれないが、それがあの二人の大詩人の表現したかつたことなのだろうか。同じ格調と意趣を狙つた詩人がいたとしても亜流でしかあるまい。李徴の詩を聞きながら袁慆は物足りなく思う。「何処か（悲常に微妙な点に於て）欠ける所があるのではないか」。名を残すという欲望が、李徴独自の表現意欲に結晶することはなかったのだ。「ひたすら詩作に耽つた」ものの、「文名は容易に揚らず」という結果に終つたことは、作品冒頭で早々に述べられている。

ただし、ひとつ、逆説がある。李徴は「詩人に成りそこ

なつて虎になつた哀れな男」である。したがって、もはや詩を詠めず、「不成長嘯但成嗥」だと言う。しかし、次の一節はどうだろう。

己は、向うの山の頂の巖に上り、空谷に向つて吼える。この胸を灼く悲しみを誰かに訴へたいのだ。己は昨夕も、彼処で月に向つて咆えた。誰かに此の苦しみが分つて貰へないかと。しかし、獣どもは己の声を聞いて、唯、懼れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎が怒り狂つて、哮つてゐるとしか考へない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人己の氣持を分つて呉れる者はない。丁度、人間だつた頃、己の傷つき易い内心を誰も理解して呉れなかつたやうに。

たしかに「一匹の虎が怒り狂つて、哮つてゐる」だけで、格調も意趣もない。しかし、「この胸を灼く悲しみを誰かに訴へたいのだ」という一点において、この虎は、人間だつた頃の李徴の何倍も詩人なのである。名を残したいという欲望だけではなく、いまや、彼は表現したいことを所有しているのだ。詩人に成りそなつて虎になつたこと

によつて詩人になつた、という逆説がここにある。だが、李徴にその自覚はない。咆哮に詩心がこもっていることに、ついに気づかない。彼にとつて、虎の声はたんに虎の声であり、その意識は「但成嗥」と彼の詩にもあるとおりだ。「今でも」彼は「己の詩集が長安風流人士の机の上に置かれてゐる様」を夢に見ているのであり、名を残す欲望にとりつかれたまま去つてゆく。

虎は、既に白く光を失つた月を仰いで、二声三声咆哮したかと思ふと、又、元の叢に躍り入つて、再び其の姿を見なかつた。

叢の中で詩は失われてゆくしかない。ただ、詩として読者は「咆哮」を聞くことができる。

ところで、こまかいことだが、李徴が「誰かに此の苦しみが分つて貰へないか」と吼えたのは「昨夕」のことである。たしかに吼えたのだらう。しかし、その時点で、「誰かに此の苦しみが分つて貰へないか」とまで思つていただろうか。孤独のあまり衝動的に叫ぶことと、孤独を伝えようとして叫ぶことは、よく似ているし、両方が重なつてい

ることも多いだろうが、後者には表現意欲と表現内容があり、この場合、その違いは重要である。さきほど述べたような、彼が詩人であるか否かに関わってくるからだ。

そもそも、「人間だつた頃」の李徴は「傷つき易い内心を誰も理解して呉れなかつた」にしても、彼は「理解してほしい」とまで思っていたのだろうか。むしろ理解されなかつたのである。「才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧」のためだ。この「卑怯な危惧」のほか、「臆病な自尊心」や「尊大な羞恥心」が、李徴を虎に変身させてゆくのだが、さて、そのことに李徴は「先刻」まで気づいていなかったではないか。「何故こんな運命になつたか判らぬと、先刻は言つたが、しかし、考へように依れば、思ひ当ることが全然ないでもない」と述べているとおりだ。

すると、「昨夕」に吼えたのは、たんに孤独に耐えかねたからであるが、それを「先刻」以降にふりかえり、「孤独を伝えたかつた、理解してもらいたくて吼えたのだ」と考え直した、ということになろう。つまり、李徴の考えは作品の途中で変化している。「山月記」で最も読み落としてならぬのはこの点である。

## 二

出張先の宿に泊まり、夜が更けた、そして、「一睡してから、ふと眼を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでゐる」。あなたならどうするか。李徴は「声に応じて外へ出て」しまふ。「声は闇の中から頻りに自分を招く」。私なら警戒する。しかし、李徴は何も疑わない。

覚えず、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駈けて行く中に、何時しか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地を攫んで走つてゐた。何か身体中に力が充ち満ちたやうな感じで、軽々と岩石を跳び越えて行つた。気が付くと、手先や脇のあたりに毛を生じてゐるらしい。少し明るくなつてから、谷川に臨んで姿を映して見ると、既に虎となつてゐた。

「覚えず」、「無我夢中で」、「何時しか」、「知らぬ間に」など、無自覚を意味する言葉が続くことに注意したい。そして、「気が付くと」虎になつてゐたのだ。途中で防ぎよりの無い変身だったのである。「之は夢に違ひない」と最

初に李徴が考えたのも当然である。我々は知らぬ間に夢に入る。防ぎようが無い。そして、さめるまで夢であることがわからない。これは夢のルールと言っている。ただし、李徴はさめることができなかった。さめることの無い夢は現実である。したがって、「どうしても夢でないと悟らねばならなかった」。現実という夢からさめる方法は一つしか無い。すなわち、「自分は直ぐに死を想うた」ところが、これを許さないのが「山月記」のルールである。自殺しようとする、「自分の中の人間は忽ち姿を消した」。虎に変身するという非現実的な話でありながら、李徴は現実から逃れることができない。たとえば、非現実を描くように見える超現実主義の「超現実」の本質は「非現実」ではなく、夢を見ている者が感じるような「強烈な現実感」である。そのルールによってこの作品は成立している。

李徴が人間でいられるのは、冒頭で述べたことの他、いま述べたような現実の中に居る間である。それは、いま述べたルールを彼自身が望んでいる面もある、ということだ。そもそも、すべての発端となった「我が名を呼ぶ声」は、そんな現実という夢に彼を送りこむ彼自身の声ではなかったか。繰り返せば、李徴は「人間に戻りたい」とは言

わない。むしろ、虎になった現実という夢から覚めたくないのである。

己の中の人間の心がすっかり消えて了へば、恐らく、その方が、己はしあはせになれるだらう。だのに、己の中の人間は、その事を、この上なく恐しく感じてゐるのだ。ああ、全く、どんなに、恐しく、哀しく、切なく思っているだらう！ 己が人間だった記憶のなくなること。この気持は誰にも分らない。誰にも分らない。己と同じ身の上に成つた者でなければ。

虎に変身するまでもなく、現実を夢のように思う者なら、「この気持」はわかるはずである。李徴がここで「誰にも分らない」と繰り返しているのは、理解してもらう可能性の、否定ではなく、拒否だ。自分の体験を自分だけの所有に閉ざそうとしている。この時点では「この胸を灼く悲しみを誰かに訴へたいのだ」という欲求がまだ生じていないことを確認しておきたい。

さて、途中で防ぎようも無く虎になってしまった。この意識は、即席の詩に「災患相仍不可逃」と詠ずる瞬間まで

変らない。つまり、変身は李徴の行為ではないのである。彼に責任は無い。だから、それは「さだめ」とより言いやうの無い出来事だった。「山月記」の中で、李徴は自分が虎に変身した理由を三つ述べている。これはその第一番めの理由だ。次に、第二番めの理由を引く。いままら指摘する必要が無いほど、違いは明らかであるが。

人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だといふ。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。これが己を損ひ、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形を斯くの如く、内心にふさはしいものに変へて了つたのだ。

李徴は、自分のせいで虎になったと明言している。この点でも彼の考えが変化していることを確認しておく。

理由の第一番と第二番では後者の方が重要であるのは言うまでもない。とは言え、前者を読み飛ばして良いわけでもない。李徴の言う「さだめ」は、「理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行く」ということだ。一言で言えば、「存在の不確かさ」

ということだろう。自分が存在している理由がわからない。むしろ、理由は無いように感じられる。だから、自分の存在がはかなく不安定なものに思えてくる。特に珍しい感覚ではない。たいてい、こうした感覚は仏教的な無常観に回収される。あるいは、パスカルのような、無限の空間を前にした恐怖として感ぜられる。たとえば、「二十億光年の孤独」を挙げることができる。しかし、李徴の場合は、やや変つた形で「存在の不確かさ」を表現するのだ。

一体、獣でも人間でも、もとは何か他のものだつたらう。初めはそれを憶えてゐるが、次第に忘れて了ひ、初めから今の形のものだつたと思ひ込んでゐるのではないか？

輪廻転生を考えたのだろうか。そう考えても問題無いかもしれないが、だとしても、根拠無く転生する点が仏教的な因果応報とは異なる。輪廻転生は「存在の不確かさ」を説くための教えではない。その発想は、あの世に行つてもまだ死ぬことがあるのではないか、という恐怖から生じている。李徴が問題にしているのは、自分が自分であることの

不確かさである。デカルトであれば、たとえ自分が夢を見ているとしても、いま考えている自分は自分であることを確信している。しかし、昨夜に見た夢を忘れていたとしたら、それはいま考えている自分の見る夢なのだろうか。そんな、答えようの無いことを李徴は問うている。

李徴は、と書いたが、中島敦は、と書いても正確だろう。「狼疾記」冒頭に、似た思索が記されている。主人公三造は南洋民の記録映画を見ている。作者とも主人公とも何一つ共有されようのない生活が映し出されている。それを見ている中に、三造は、久しく忘れてゐた或る奇妙な不安が、何時の間にか又彼の中に忍び込んで来てゐるのを感じた」。この「奇妙な不安」が「存在の不確かさ」である。

久しい以前のことである。其の頃三造は斯ういふものを――原始的な蛮人の生活の記録を読んだり、其の写真を見たりする度に、自分も彼等の一人として生れてくることは出来なかつたものだらうか、と考へたものであった。確かに、と其の頃の彼は考へた。確かに自分も彼等蛮人共の一人として生れて来ることも出来た筈ではない

のか？

自分が別人として「生れて来ることも出来た筈ではないのか」と疑うことから、自分が「もとは何か他のものだったんだらう」と思うようになるまでの、思考の幅は大きくはない。ただ、このことに「いら／＼したはがゆさ」を覚える三造に対し、李徴は諦念が深い。「そんな事はどうでもいい」のである。

どうでもよくないのは、「曾て作る所の詩数百篇」だ。

その中、今も尚記誦せるものが数十ある。之を我が為に伝録して戴き度いのだ。何も、之に仍つて一人前の詩人面をしたいのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂はせて迄自分が生涯それに執着した所のものを、一部なりとも後代に伝へないでは、死んでも死に切れないのだ。

李徴が「伝録」を依頼しているのは「産を破り心を狂はせて迄自分が生涯それに執着した所のもの」である。つまり、厳密には「名」ではなく「作品」を残そうとしている

る、とも言える。<sup>(1)</sup> 作品という形で記憶を残す欲望である。「賤吏」や「俗悪な大官」との対比でかつて彼が考えた「詩家」とは異なる詩人観がうかがえる。このあたりから微妙ながら李徴に変化が生じ始めている。

### 三

再会した旧友が虎に变身していた。私なら最初の一言は、「どうしちゃったの？」だろう。しかし、袁慘は礼を尽くし、「懐かしげに久闊を叙した」。彼の最初の問いは「何故叢から出て来ないのか」である。さらに、「都の噂、旧友の消息、袁慘が現在の地位、それに対する李徴の祝辞」を「青年時代に親しかつた者同志の、あの隔てのない語調」で談じ合って、やっと初めて、「李徴がどうして今の身となるに至ったかを訊ねた」のである。袁慘とて、何よりもそれが知リたかっただろうが、その好奇心をむき出しにしないのが、彼の思いやりだ。かくして李徴の告白が始まる。<sup>(2)</sup> 相手が私だったら、李徴の心は閉ざされたままであったに違いない。

また、私が零落してみすばらしく歩いている際に旧友を見かけたとする。たぶん身を隠すだろう。虎に变身してい

たらなおさらだ。ところが、李徴は袁慘に「我が友」と呼びかけられると、「如何にも」と答えるのだ。さらにこう頼む。

今、図らずも故人に遇ふことを得て、愧赧の念をも忘れる程に懐かしい。どうか、ほんの暫くでいいから、我が醜惡な今の外形を厭はず、曾て君の友李徴であつた此の自分と話を交して呉れないだらうか。

これは「自ら恃む所頗る厚く」と紹介された男らしくない。自分の孤独は自ら処理し、寂しげな素振りなど見せぬのが、本来の李徴ではないのか。それができないのは、この時、さすがの彼も自負心が衰弱しきつていた、ということだ。だから、袁慘のいたわりに触れ、その好意に甘えてしまうのである。そして、すでに述べたように、袁慘は「李徴がどうして今の身となるに至ったかを訊ねた」。答えるに際し、李徴は躊躇しなかっただろう。

李徴は語り続ける。この間、袁慘は一言も口をはさまない。李徴の語りを追う限り、ほとんど相槌を打つタイミングさえ見当らない。李徴の独白だ。しかし、これは袁慘が



居なくてもいいわけではない。もともと李徴には表現したいことなど無かったのだから、聞き手が居て求められてこそ語りなのである。「文名は容易に揚らず」に了った彼にとって、初めて聞き手が出現した状況でもある。

語るにつれ、李徴に興が乗ってくるのがわかる。「それは到底語るに忍びない」のあたりで、袁惨の問いには答えきったとして、そこで口をつぐんでも良かったろう。しかし、もう李徴は止められない。作者も、他の箇所ですのような話題転換の情景描写をはさめず、改行さえできず、李徴の言葉を書き継ぐしかない。「一体」「いや、そんな事はどうでもいい」「ああ、全く」「所で、さうだ」という李徴の口ぶりは、いかにもその場の思いつきを次々と発しており、もはや自動記述のようなものだ。

その時、言葉は李徴の意識を超える。思ったことを口に出すのでなく、口にした言葉が李徴を引きずって、それまで思ってもみなかった言葉を吐かせるのだ。こうして言葉に取り憑かれた存在が詩人であり、詩人はそんな言葉を自分の「思い当ること」として語り続けるだろう。ここまで私は、李徴に変化がある、と何度か述べてきた。それはこのようにもたらされたものだ。

何故こんな運命になったか判らぬと、先刻は言ったが、しかし、考えやうに依れば、思ひ当ることが全然ないでもない。人間であつた時、己は努めて人との交を避けた。人々は己を倨傲だ、尊大だといった。実は、それが殆ど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかつた。勿論、曾ての郷党の鬼才といはれた自分に、自尊心が無かつたとは云はない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいふべきものであつた。

この時、李徴は改心して別人になつてゆくわけではない。むしろ、日頃のかつての彼自身を取り戻してゆく。あえて言えば、人間らしくさえなつてゆく。

その示標が「自嘲癖」だ。李徴は自分の詩を「伝録して戴き」「一部なりとも後代に伝へないでは、死んでも死に切れない」という思いをかなえてもらう。それでひとつ気が楽になったのか、「突然調子を変へ、自らを嘲るか如くに言つた」。自嘲が蘇つてきて、李徴は彼らしくなつてゆく。自嘲の回復は自省の回復した証でもある。虎に変身した本当の理由に「思ひ当る」のはこの時だ。そして、ここまで語り尽くし、ようやく妻子を思い出す余裕も生じた

ここで、「忽ち又先刻の自嘲的な調子に戻つて、言つた」。

本当は、先づ、此の事の方を先にお願ひすべきだつたのだ、己が人間だつたなら。飢ゑ凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を氣にかけてゐる様な男だから、こんな獸に身を墮すのだ。

虎に变身した理由の第三番がこれだが、理由それ自体はすでに語り尽くされており、発言の内容としてはここからあらためて読みとるべき何も無い。重要なのは、これが「自嘲的な調子に戻つて」いることである。ついさっきまでの「慟哭」は最早無い。李徴は「李徴」に還つてゐる。彼特有の自意識が再び働くようになってゐる、と言い換えてもいいだろう。自意識という一見して個人の内面で完結しているものが、それまでの純粹な孤絶においてではなく、聞き手を得ることによって成立してゐる。

すでに李徴は、憔悴しきつて話相手を切望し懇願していた先刻の李徴ではない。最後の場面では、「袁慘が嶺南からの帰途には決して此の途を通らないで欲しい」と、再会を拒んでいる。そして、袁慘に出会つた当初は「異類の

身」となった己を恥じ、「どうして、おめく」と故人の前にあさましい姿をさらせようか」と言つて、叢から出てこなかつた李徴でもない。あの時は「自分が姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭の情を起させるに決つてゐる」とそれを恐れていたのに、今はむしろ「我が醜惡な姿を示して、以て、再び此処を過ぎて自分に会はうとの氣持を君に起させない」ことを望んでいる。かくて、結尾の李徴の姿には、誇りのようなものさえ感じられる。<sup>(3)</sup>

一行が丘の上についた時、彼等は、言はれた通りに振返つて、先程の林間の草地を眺めた。忽ち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼等は見た。虎は、既に白く光を失つた月を仰いで、二声三声咆哮したかと思ふと、又、元の叢に躍り入つて、再び其の姿を見なかつた。

「悟浄歎異」の最後に、「俺は独り目覚めてゐる」と主人公悟浄は語る。星空を見上げ、「何物かに対する憫れみを何時も湛へてゐるやうな眼」を意識する。「山月記」には、この悟浄の位置にある者も、「眼」を持つ者もない。李

徴には「眼」を感じるような覚醒がなく、袁惨の眼も「惘れみ」を湛えるというよりは李徴に同情する涙に濡れている。「山月記」において、この「眼」のまなざしを投げかけているのは作者であり、それを意識して「目覚めている」のは読者だろう。これは、本稿の枠を超える問題である。

#### 注

(1) 私の授業の学生瀧川紘輝が指摘した。

(2) 木村一信「『山月記』論―〈滅び〉への恐れ―」に、「虎の李徴が袁惨に出会う場面や別れの場面には、袁惨の李徴へのあたたかい愛情が感じられる。そうした中で、李徴は自らの内面や自我、又、存在全体にかかわる様相をあらわに告白していくのである」という短い指摘がある(『中島敦論』、一九八六年、双文社出版)。

(3) 私の授業の学生矢野百都は「虎になった運命を受け入れた姿」と指摘した。

※中島敦の作品からの引用は『中島敦全集第一卷』(一九七六年、筑摩書房)によった。ただし、ルビを省き、旧字は新字に改めた。

(本学日本語日本文学科教授)